

## 増加する虚血性心疾患

—知名日本人と一般日本人の死因分析とその推移—

川崎医科大学 内科

山 岸 剛\*, 小 林 武 彦\*

沢 山 俊 民

(昭和49年12月2日受付)

### Increase in Mortality from Ischemic Heart Disease

—Comparison between “the Well-known” and the Total Japanese Populations—

Tsuyoshi Yamagishi, M.D.,\* Takehiko Kobayashi, M.D.\*  
and Toshitami Sawayama, M.D.

Department of Medicine, Kawasaki Medical School

(Accepted on Dec. 2, 1974)

本邦においても近年虚血性心疾患が増加している事実にかんがみ、環境において近代的欧米風の生活を送っていると考えられる“知名人”と一般人とを対象にして、両者の死因とその推移について検討を試みた。“知名人”死因に関する資料は1973年度版と1953年度版の新聞紙上に発表された死亡者から得られたものである。最近の“知名人”と全人口における心疾患死亡率は、前者が29.4%で第1位、後者は12.5%で第3位であった。一方、20年前では前者が18.6%で第2位、後者は7.3%で第6位であった。また、後者における、および年次推移による心疾患死亡増加の内訳は虚血性心疾患のそれであることが明らかとなった。

以上、年次の把握に基づく虚血性心疾患の増加はもとより、このことが“知名人”において一般人よりも著しかったことは本症と近代欧米式生活様式との関連が重視されるという点で重大な問題であろう。

In consideration of the fact that ischemic heart disease has been lately increasing in our nation, an analysis was made in terms of mortality and its time course between “the well-known” (A) and total (B) populations. The data base on death cause of “the well-known” was obtained from reviewing the newspaper edited in 1973 and in 1953. The mortality rate from heart disease in the recent year between the two groups revealed 29.4% (the first rank) in A and 12.5% (the third) in B. Twenty years ago it was 18.6% (the second) and 7.3% (the

本稿は上記2名のローテーションレジデント\*の循環器内科研修期間に完成されたものである。

This manuscript has been completed during their training as rotating residency\* in the Division of Cardiology.

sixth), respectively. That the increase in ischemic heart disease was the main cause of the increase in all heart disease was demonstrated. It is our conclusion and may be a serious problem that the increase in ischemic heart disease in "the well-known" than in the total population would be related to more modernized and westernized patterns of life in the former.

## はじめに

わが国においても近年ようやく虚血性(冠動脈硬化性)心疾患 IHD—とくに急性心筋梗塞症 MI—による死亡例の増加をみ、一般人死因の全国集計では“心臓病”死亡は3位に位するようになったが、IHDによる死亡例数は米国の10分の1程度にすぎない。

一方、生活様式が欧米化してきたことにより IHD の原因である動脈硬化の発現とその重症度が人口の老齢化と相俟って高率になり、とくに知名人における IHD の罹病率、死亡率は社会問題視されてきた現状である<sup>1)</sup>。そこで私共もこの点に興味をいだき、わが国の“知名人”と一般人との死亡原疾患に差がみられるかどうか調査してみることにした。しかしそれに関する具体的なデータを発見しえなかったので、新聞紙上の死亡欄に発表された人名を“知名人”とみなし、過去1年間と20年前における一般人との死亡原因とその推移に関して IHD を中心に検討、集計してみた。

## 資 料

(1) 1973年及び1953年の全国版の新聞の死亡欄及び第1面と社会面でとりあげられたいわゆる知名人の死亡に関する資料は、朝日新聞縮刷版<sup>2)3)</sup>を使用した。

(2) 1973年及び1953年の一般人死因分析を得るため昭和46年に発行された厚生省大臣官房統計調査部編の人口動態統計上巻<sup>4)</sup>を使用した。ただし最新版で年間を通じたものが1971年度版で、1973年と比較する場合それを用いざるを得なかった。

(3) 年齢による死因分析は、1950年、1955

年と5年毎の統計しか記載されていなかったため、1955年のそれを用いて比較した。

## 方 法

(1) 1973年の「知名人死亡」は、779名、平均年齢71.47歳で、表1にまとめたものを対象とした。

(2) 1953年の「知名人死亡」は237名、平均年齢65.70歳で、表4にまとめたものを分析した。

(3) 一般人の死因分析として1971年及び1953年の統計をまとめて検討した(表2および表5)。

(4) 同年齢、同年代群の死因を知名人と一般人とで比較するために、1973年に対しては1971年における65~74歳の一般人死因分析を、1953年に対しては、1955年における60~69歳の一般人死因分析を行った(表3および表6)。

(5) いわゆる知名人といわれる年齢層は一般人に比較して高年齢にあり、(4)でとりあげた様に同年齢による比較でないという意味をもたないのであるが、その死亡原因の worst three

Table 1. Cause of death and its numbers among "the well-known" in 1973.

総数：779名(うち女性59名)、平均年齢：71.47歳

(1) 心疾患	229名 (29.4%)
慢性心疾患 (心不全, 心臓衰弱, 等)	98名 (12.6%)
急性心疾患 (心臓まひ, 急性心不全, 等)	42名 (5.4%)
心筋梗塞 (狭心症を含む)	89名 (11.4%)
(2) 悪性新生物	163名 (20.9%)
(3) 脳血管障害	126名 (16.2%)
(4) 老 衰	74名 (9.5%)
(5) 肺 炎	44名 (5.7%)
(6) そ の 他	143名 (18.3%)

**Table 2. Cause of death and its numbers among the total population in 1971.**

総数：684,521名

(1) 脳血管障害	176,952名 (25.9%)
(2) 悪性新生物	122,850名 (17.9%)
(3) 心疾患	85,529名 (12.5%)
(4) 不慮の事故	42,433名 (6.2%)
(5) 老衰	(5.2%)
(6) 肺炎	29,649名 (4.3%)
(7) その他	(28.0%)

**Table 4. Cause of death and its numbers among "the well-known" in 1953.**

総数：237名(うち女性11名), 平均年齢：65.70歳

(1) 脳血管障害	51名 (21.5%)
(2) 心疾患	44名 (18.6%)
{慢性心疾患 急性心疾患 狭心症	18名 (7.6%)
	10名 (4.2%)
	16名 (6.8%)
(3) 悪性新生物	38名 (16.0%)
(4) 老衰	22名 (9.3%)
(5) 肺炎	11名 (4.6%)
(6) その他	71名 (30.0%)

**Table 3. Cause of death and its numbers among the high-aged group of the total population in 1971.**

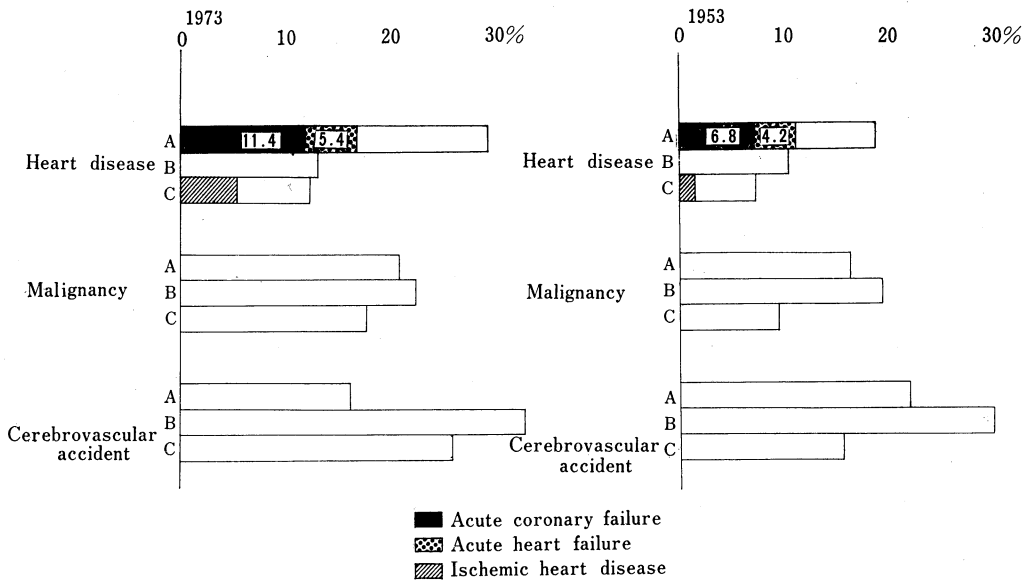
総数：176,214名

(1) 脳血管障害	58,029名 (32.93%)
(2) 悪性新生物	39,667名 (22.51%)
(3) 心疾患	23,415名 (13.29%)
(4) 肺炎	6,668名 (3.78%)
(5) その他	(27.5%)

**Table 5. Cause of death and its numbers among the total population in 1953.**

総数：772,547名

(1) 脳血管障害	116,351名 (15.1%)
(2) 悪性新生物	71,578名 (9.3%)
(3) 老衰	(8.8%)
(4) 肺炎	(8.0%)
(5) 全結核	(7.5%)
(6) 心疾患	(7.3%)
(7) その他	(44.0%)



**Fig. 1.** Percentages of the 3 main causes of death -- heart disease, malignancy and cerebrovascular accident -- in both years (1973 in the left panel and 1953 in the right) among 3 populations (A: "the well-known", B: "the high-aged" of the total population, C: the total population)

**Table 6. Cause of death and its numbers among the high-aged group of the total population in 1953.**

総数:	125,611名
(1) 脳血管障害	36,688名 (29.21%)
(2) 悪性新生物	23,982名 (19.09%)
(3) 心疾患	13,089名 (10.42%)
(4) 肺炎	4,129名 (3.29%)
(5) その他	(38.0%)

はほぼいずれも、脳血管障害、悪性新生物および心疾患である故、(1), (2), (3), (4)でとりあげた統計をこの三者にかぎってまとめて図にした(図1)。ただし、厚生省統計では人口10万人当りの数値が用いられているが、ここでは死亡数に対する百分率であらわした。各3組の柱のうち、Aが知名人の統計、BがAと同年代の一般人統計、Cが全年代の一般人の統計である。

## 結 果

まず一般人及び同年代の一般人における1953年の統計では、脳血管障害、悪性新生物に比較して少ない心疾患が、知名人の統計では脳血管障害に次いで第2位を占めていた。1973年でも同様で、特に知名人については、第2位の悪性新生物の約1.5倍に達し、知名人が心疾患により死亡する率は、一般人に比較して大であると結論してよいと考えられた。

心疾患、特に虚血性心疾患(IHD)については、知名人の死因のうち心筋硬塞および狭心症と診断されたものをまとめてMIの項に含めた(図1の黒でぬりつぶした部分)。また、その他の急性心疾患(心臓まひ、急性心不全等)を同図の斜線で示したが、1953年から1973年にかけて、心疾患全体が1.5倍に増えると同時にIHDの項も約2倍に増え、明らかに本症での死亡が増加しているといえる。また、1953年度の場合は、一例も“心筋硬塞”による死亡がなく、すべて“狭心症”の診断で死亡していた。

次に一般人死亡の厚生省統計において、心疾患(図1の左右上段のC)は、リウマチ性心疾患(RHD)、高血圧性心疾患(HHD)、虚血性心

疾患(IHD)、及びその他の心疾患(other HD)に分類されている。ところで心筋硬塞(MI)が含まれているのはIHDであるから、その比率を斜線で示してみた。心疾患全体としてもこの20年間で増加をみているが、より著明なことは、IHDの占める割合が29%から40%強に倍増していることである。しかし特に知名人にその伸びが著しいとはいえなかった。一方、両年度における一般人高齢者群の心疾患死亡(図1左右の上段B)中IHDの割合は統計に記載されていないので不明であった。

## 考 察

### (1) 診断名に関して

IHDのうちMIの診断については、心電図所見や血清酵素値の結果を含めてのものかどうか不明であるが、恐らくは狭心発作が最も診断上に重要な点であったろう。従って狭心症と診断された例もMIに含まれている可能性が高いと思われる。特に1953年度の知名人死亡ではMIの診断が1例もなく“狭心症”死のみという点からも、病歴それも家人や往診医などの印象のみで判断がされた事実が十分に考えられる。また同様の理由で急性心疾患(心臓まひ、急性心不全等)の中にもMIが当然含まれているであろう。

### (2) 心疾患死亡の推移について

時代的変遷では、心疾患による死亡者は増加する傾向にあり、なかでも壮年層、高年層における増加率は著しい。とりわけ知名人においてその傾向が顕著に現われてきている。疾患別では、心疾患による死亡順位が上昇する傾向を示し、特に近年、知名人においては脳血管障害、悪性腫瘍を抜いて第1位となり、知名人の特殊性がクローズ・アップされる。

なお、知名人と一般人における差違が、食生活、労働条件等、知名人における特殊性により生じているとすれば、その特殊性を分析する事により、心疾患の予防と今後の対策に大きな指針が得られるものと考えられる。

### (3) 知名人の特殊性

今回の資料から得られた最近の知名人死因の趨勢は、まさに外国居住の日本人外交官のそれに一致している<sup>1)</sup>。また、ハワイ生まれの日本人2世、ハワイに移住した日本人、国内居住の日本人の死因調査では、虚血性心疾患死亡が前者で最も高く、後者で最も低いことが論ぜられ

ている<sup>2)</sup>。

これらのことを総括すると、本症にて死亡する理由は人種差でなく、食生活をはじめとするいわゆる近代的欧米的生活様式が関係していることは必至である。

## 文 献

- 1) 日野原重明：日本人の死因はどう変わる—心臓病時代を避けるために。Modern Medicine, 1: 12—17, 1972.
- 2) 朝日新聞縮刷版, 1953 (Nos. 379—390).
- 3) 朝日新聞縮刷版, 1973 (Nos. 619—630).
- 4) 昭和46年人口動態統計上巻. 厚生省大臣官房統計調査部編.
- 5) Kay, E.: Personal communication.